紙芝居「大野と箱館戦争」　あらすじ

今から140年ほど前のことです。

江戸時代が終わり、明治時代が始まったばかりのころ、日本各地で続いた戊辰戦争に敗れた旧幕府の兵士たち（榎本軍）が鷲ノ木浜に上陸しました。彼らはこの蝦夷地で新しい国をつくることを夢見ていたのです。

鷲ノ木浜（森町）に上陸した榎本軍は、峠下、大野方面と川汲峠（函館）を通る二手に分かれて進軍しました。その手には「蝦夷地開拓の嘆願書」が握られています。

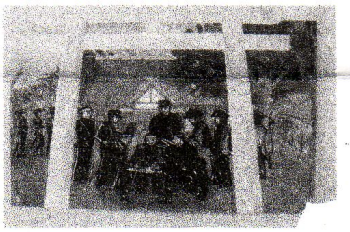
しかし、新政府の兵士たちは戦いの準備をして待っていたのです。すぐに峠下で戦闘が始まり、大野村と七重村で激しい戦いが繰り広げられました。箱館戦争の始まりです。

意冨比神社の戦い

雪まじりの雨の中、意冨比神社の境内で銃撃戦が始まりました。大砲の弾が十字街の家に落ちて火事になり１０軒以上が焼けました。

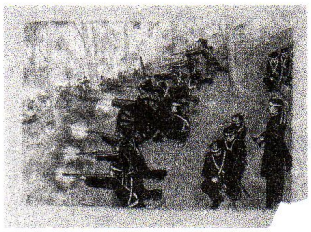
ここでは戦いになれていた榎本軍が勝利し、五稜郭に政権を樹立しました。

年が明ければ、新政府軍が攻めて来ます。大野村では、榎本軍が村人と協力して戦いの準備を進めました。



市渡神社で作戦会議の土方隊

明治２年４月９日、新政府軍は乙部に上陸。土方歳三率いる榎本軍は、市渡神社を作戦本部に充て、江差山道を通ってくる新政府軍に備え、台場山（二股口）に塹壕を造りました。

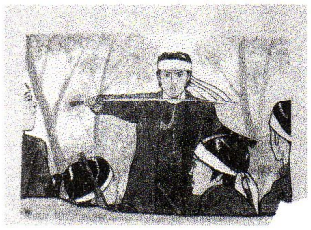


二股口の戦い

台場山で一回目の戦いが始まり、土方隊130人に対し、新政府軍は800人で攻めて来ましたが、土方らは１６時間に及び台場山を死守。新政府軍はいったん引き揚げます。

二回目の戦いは二昼夜も続きました。援軍を加えた新政府軍は1,600人、土方隊は応援を加えても300人ほどでした。

しかし、その間に矢不来台場（上磯地区）が落されたため、ついに土方らは五稜郭に引き揚げるのです。



指揮をとる土方歳三

５月１１日、最後の決戦で土方は銃弾に倒れ、榎本軍は降伏し、箱館戦争は終わりました。

大野村にも平和が訪れ、大勢の人々の往来で賑うようになるのです。